

# 研究所報

No. 2

発行所

社 神 高 彌  
 研究所 信 淵 佐 風 篤 平田  
 園 1-16 秋田 市 千 秋  
 電話 0188-32-4496

## 雷風義塾と平田古道学

齊藤 壽胤

久保田（秋田）藩における藩校の開設は寛政四年（一七九二）で、平田篤胤大人の漢学の師とされる

その学問は折角の和学方では受け入れていないのである。

（『大壑君御一代略記』による）初代祭酒中山菁莪をして開講された。その後、文政八年（一八二五）には全国でも可成早い方で「和学方」の設立をみている。和学は久保田藩では後に「本朝学」とも称される、所謂国学である。だが、他藩にみられるような独立の和学館は終止存在しなかった。また十分な財政に裏付けられていた和学方でもなかった為、その活動には自づと限界があった。そして天保十二年（一八四一）には晩年に近かった篤胤大人が秋田へ帰藩しても、

その学問は折角の和学方では受け入れていないのである。当時、仁孝天皇から著述天覧の大栄誉をうけ、全国の祠職のほとんど傘下にしていた吉田家からは神官祠職への古学教授を委嘱されるなど、高い名声のあった篤胤大人でも、郷里久保田藩では、この大学者に対して忌諱の態度をとっていた。和学方の主流は本居学派の人々で占められていたほか、郷里に帰省してからも藩の待遇は必ずしも好ましい状態であったとはいえない。没するほどにも正式にその学問を受け入れる状態は遂になかったのである。

天保十二年四月二十二日（秋田

雷風義塾と平田古道学

平田篤胤と佐藤信淵の学問と事蹟

彌高神社外伝

佐藤信淵大人追贈

余談

桐原 善雄

16

齊藤 壽胤 1

齊藤 壽胤 2

洪谷鐵五郎 11

16

帰着）から天保十四年（一八四三）九月十一日死去するまで平田門への入門者は五十三人。このうち三十九人は秋田人である。これを見れば、この間の後援者がないわけではなく、梅津主馬、小野岡市太夫、小野崎通貫の藩士、また数人の私的後援者や信奉者がいたが、これとても平田古道学の隆盛をみるには至らなかったことは前述の如くである。

こうした状況にもかかわらず、時代の波は大きく変革しようとしていた。平田古道学が秋田で正式に享受されるのは、文久三年（一八六三）の雷風義塾の設立を待たねばならなかった。没後二十一年目にしようやく私塾ではあるものの、国学塾が設立され、ここで平田古道学が教授されるのである。雷風義塾は篤胤大人の生家であるにわたる大和田盛胤が、嗣子鉄胤等と関わって小野崎要等の協力、吉川忠安等が講師となり開化した

ものであった。以降、明治維新前後まで平田古道学の興隆にともない、そこに学ぶ武士、商人等の支持を得て、藩論を次第に尊王派に傾け、遂に戊辰の役に於いて、秋田に錦旗をとらせたのである。『気吹舎門人帳』によれば維新の前には平田門入門者（没後門人として）がすこぶる多いことが解り、平田古道学も秋田に定着したといつてよいと考える。

この意味で、秋田の国学史上では雷風義塾の設立存在は極めて大きかったのである。現在秋田市中通六丁目三番地（南通り沿）に雷風義塾址と刻まれた石碑が立っている。碑の背面には小野崎要の子、通亮の歌が刻まれてはいるが今日可成風化している。

いざ寄りて学の友ら諸共に  
 いたづき立てむ国の真柱  
 と読みとることが可能だ。この歌には雷風義塾設立の思いと、平田古道学のもとに集う学徒門人等の思いが緊密と伝わってくる。この建立年月は不明だが、本来の雷風義塾が設立された場所は、現地よりも少し南の通り一丁裏手あたりとされる。

## 平田篤胤と佐藤信淵の学問と事蹟

## 一、序

齋 藤 壽 胤

「篤胤信淵巨人の教え」と秋田県民歌にうたわれて親しみ、秋田県が生んだ大先覚者として終戦までは秋田県内各学校に二人の肖像画がかかげられていた。明治以降、特に秋田県では学問的偉人として教育関係者が主に推進し顕彰してきた。然し近年は教科書的知識程度での国学者篤胤、経済農政学者信淵という位で、その人となり、学問、思想、事蹟について深く知る人々は少なくなった。嘗ての秋田県教育会が学問教育の先人としての位置に据えてきたことも過去の事となりつつある。茲ではこの二者の学問と事蹟を具体的にとらえるものであり、更に余裕があれば現代的な意義を考察してみたいと考える。

## 二、平田篤胤の学問と思想

## 1. 生涯と事蹟\*

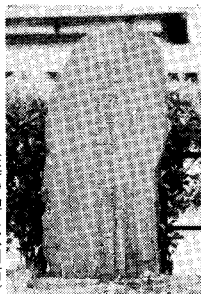
前期1 出生は江戸に出るまで  
 \* 事蹟伝記については、鎌  
 胤撰「大勢君御一代略記」  
 を底本とするが、これに  
 は多少誤りがあることが  
 明らかとなっている。  
 \* 「正見覚書」  
 前期2 江戸出府当時の受難

\* 「略記」には享和元年「今年初メテ鈴屋大人ノ著者ヲ見テ大キニ古学ノ志ヲ起ス」とある。  
 \* 太宰春台「弁道書」の批判

安永五年（一七七六）八月廿四日久保田城下、現秋田市中通に久保田藩士大和田清兵衛祚胤の四男として生まれる。正吉と命名された。大和田家の財政的事情その他により正吉は幼少より里子や養子に出されたらしく、親子の愛情も薄く育ったといわれる。元服して胤行を名乗ったというがやがて二十歳の寛政七年（一七九五）の正月八日に、再び故里に帰らぬという決心のもとに脱藩し江戸に出る。廿五歳に備中松山藩士平田藤兵衛篤穂の養嗣子となり平田半兵衛篤胤を名のる寛政十二年（一八〇〇）までは、大八車の挽子、火消し夫、岡十郎に奉公、飯炊きまでして苦学を強いてきた。

享和元年（一八〇一）廿六歳石橋織瀬と結婚。翌年長男が生まれたが、僅か二歳で死去している。享和三年には最初の著書『呵妄書』\*を著す。この年に本居宣長没後の門人となったといわれる。この頃に古道学に目覚め、以後没年までの間、一心に精勤刻苦し、和漢洋の書籍を読破し、生涯を学殖にうつめていったのである。

篤胤信淵巨人の訓  
 久遠に輝く北斗と高く  
 錦旗を護りし戌辰の栄は  
 矢留の城頭花とを薫る  
 歴史はかくわし營の秋田  
 秋田県民歌



生涯の碑（秋田市）



篤胤肖像画（秋田市高堂氏所蔵）

中期！ 本居門に入門と継受

### 中期2 平田学の成熟期

\* 服部中庸から本居太平宛の書翰に、『書見著述に掛り候ては、十日、二十日にても昼寝することなく、労働候時は三日も五日も飲食せずして臥し又覚め候時は元の如し神々凡人にては無御座候』とある。

\* 「あわれ比女よ互にいと若かりし時より親戚あへる由ありて」と『霊能貞柱』にみえる。

\* 鹿島香取に遊学参詣途次に拾得したもので神秘なものとて後まで珍重した。

\* 「天之岩苗記」に詳しい。

\* 篤胤著に『神字日文伝』、『神字日文疑字編』があり、信淵著に『神字日文考』と『神字日文考補遺』がある。

\* のちに折目民俗学から研究法や資料性について評価されている。

\* 「せせらぎに潜める龍の雲を起し天に知られる時は来にけり」と詠む。

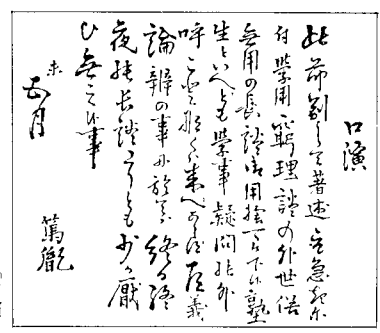
文化元年（一八〇四）春に始めて講筵を開き、真菅乃屋と号した。翌年に長女千枝子（後におてう）生れる。文化四年（一八〇七）には医業を兼営し元瑞と改名。五年には二男半兵衛（後に又五郎）が生れる。この年神祇伯家より神職へ古学教授を委嘱せられる。文化六年には医業を廃してしまふが、医業は家計を補うためであつたらしく、関心は専ら国学にあつた。八年には『出定笑語』『古道大意』『俗神道大意』など所謂「大意」物などの著述もいよいよ盛んとなり、学問には心血を注いでいた。この年十二月初めに駿河国の門人の招請をうけ、この駿府客余中であつて『霊能貞柱』草稿など『古史成文』『古史徴』などを著述。文化九年三十七歳の時、妻織瀬死亡する。「天地の神はなきかもおはすかもこの禍を見つつますらむ」と詠う程、妻の死に対してはさすがの篤胤も氣をおとした。織瀬時に卅一歳。窮乏の学者家計の切り盛りと病弱な子供の養育に辛勞した十二年を思う篤胤の氣持は、神々さえもうらむような氣持であつたらう。然し、これが契機となり、人の死後の靈魂の行方を明らかにしようとする『霊能貞柱』の稿の完成に深い考察と影響を及ぼすに到つた。文化十二年には篤胤大病にかかり、貧困になやんでいる。この年同郷の佐藤信淵が入門。その後信淵の名は著書にもしばしば見えており、文政十一年頃までの間、門弟としてよりは学友として交渉し合つたようである。翌年氣吹舎と改称し大角（大壑）と名乗る。文政元年（一八一八）四十三歳。九月に二男又五郎十一歳で死去する。篤胤は幼少からしても、独立しても家族との関係においては不幸な面がみられる。十一月には門人山崎長右衛門の養女りよと再婚する。先妻織瀬夫人に対する愛情には深いものがあつたのであろう、ここに迎えた後妻にも里勢と名乗らせている。里勢夫人とに子はもうけなかつたが、先妻の遺子おてう（お蝶）を愛することは濃やかで肉親との差はなく接するなど晩年江戸を追放になつた篤胤に随従し、篤胤の最後まで連れ添つた。文政三年（一八一〇）四十五歳。この年に初めて天狗小僧寅吉を知り、小年寅吉の語るところの幽界に深く耳をかたむけ、幽界に関する研究に傾倒していった。次年には神代文字の研究に進むなど、仙童寅吉との出会いにより、文政五年（一八二二）には『古今妖魅考』『稻生物怪録』等の著述がなされていった。幽冥界のことを闡明するために種々の方法を探つて、生きながら幽界に赴いたことがある者から聴取する方法をよく用いている。文政六年（一八二三）板倉候出仕を退身し、上京してこの年始めて服部中庸に会い、著書『古史成文』『霊能貞柱』など数巻を仁孝天皇に献上し天覧の榮によくした。そして吉田家及び本居家を訪れて吉田家から神職に古学教授を委嘱される。この時に師である宣長の贈位運動を積極的に行っている。後に整理しまとめられた『毀譽相半書』に見られる如く、当時篤胤に対する評は



「天之岩苗」(千葉県熊野神社蔵)



「天覧」印



「口演」

\*「我れ大皇國の大道の妨害を爲したる者は悉く我が學問上の敵なれば少かも容赦なく速かに打罰むべき所より劇言は出るなり」と『毀譽相半書』に述べられてい

### 中期3 平田学の拡張

分かれ、反平田派の非難は可成激しいものがあつた。これは本居學が国文、国語、国史についての文献考証学的研究方法という即ち歌文派をとる立場にあり、篤胤は古道、古神道に對する宗教的思弁思想性をもつ、所謂古道派の立場で彼はその頂点に立つものであつたからで、反対派は篤胤の強烈な思想性や情念性を伴う実践性を嫌つた人々であつた。これらの評價は現在までも尾をひいている。而も、「師の説になすまざる」という考えで、學問上の論点相違にはたとえ師であつても厳しく対応したものであつたから、多くの場合は彼を嫌つたに違ひなからう\*。然し、師に對する尊敬の念はまこと人の道に叶うものがあることは認めてよい。ここに人間性を見るものである。

文政七年（一八二四）四十九歳には門人碧川篤貞を養子としておてうに配した。これが後の鉄胤である。文政八年（一八二五）、尾張徳川家に出入りを許され手当てを受けたがこれも後に幕府の意向により停止されている。この間、天保元年（一八三〇）頃に佐竹家への婦參を願ひ出、この運動は天保九年（一八三八）に叶えられるのであるが、長い間の本意はやはり婦參にあつたといわれる。文政九年（一八二六）に『大扶桑國考』が成る。この著作が後に問題となり、婦參の宿願叶つた時には絶版という事態になり、天保十二年に到つては著述差し止めという決定的な事がまちうけていた。

文化八年より文政六年までは學問に心血をそそぎ込む。新しい思想形成の宿命かもしれないが、悩みと苦しみは剣戟をのぼるが如き時代であつたと思われる。

文政七年から天保にかけては後継者鉄胤を得て多くの著作をし、平田学の拡張期をなしていた。この後平田学の後期ともいえる時期には林大學頭の答申による幕府の公權力の干渉など、少しずつ幕府の忌押にふれていったととらえられる。

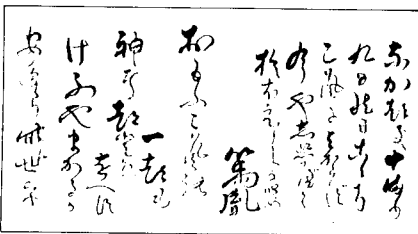
天保六年六十歳以降は再受難期であつた。『皇國度制考』『天朝無窮曆』について司天台からの究問があるなど、次第に幕府は篤胤を忌避しはじめていた。然し一方では天保十一年に白川家から神祇道學頭職を委嘱されるなど名聲に衰はなかつたが、晩年に近かつた。

天保十二年（一八四一）六十六歳正月一日に突如として著述差し止め、国元へ帰還せよとの幕命が達せられる。時流を超えた學問と道において当時の幕府の根底をゆるがすと考えられた結果であろう。止むなく帰藩し再び秋田の地を踏んだ篤胤は、しばらくの間大和田生家の一室に寓居した。次年にはようやく藩よりの中亀ノ丁に居宅をうけ、ここで天保十四年閏九月十一日に没したのである。「おもふことの一つも神につとめおへすけふやまかるかあたらこの世を」と数日前に記したものが辞世となり、まさに絶筆となつた。

篤胤は生前に墓地として手形山広沢山を定めていた。それにより、眺望のよき広沢山に、

### 後期 受難再遇

### 挽期 郷里秋田帰還



「辞世」



終馬の碑（秋田市）

\* なきからは何処のもとにはてむとも露は翁のもとにゆかなむ

\* 『略記』に

著述之書、凡百余部、巻数千卷ニ近カルベシ、但シ此ハ究メテハ言ヒガタク、只大凡ヲムルナリ

\* 『古道大意』

\* 『西籍概言』・『阿妄書』

\* 『出定笑話』・『印度感志』

\* 『古史微』

\* 『天津祝詞考』

神とも仰ぎ尊び親しんだ宣長の奥墓のある伊勢の国に向け、正装正座にて葬られている。

## 2. 学問と思想

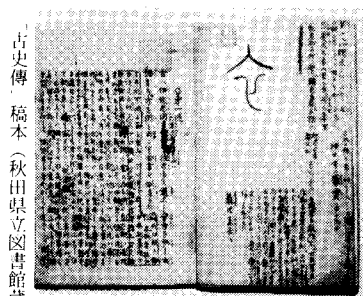
一身を学と道に捧げ、生涯に著述百部千余巻といわれ、その内容は古史、古道、易学、曆学、仏学、道学、儒学、文学、語学、尺度量法、諸宗門など漢洋学に亘って考究した。この中で『靈能真柱』『古史伝』『古道大意』『古道大意』は神道史上における重要な著書であり、学問思想上でも中心的存在である。

国学の萌芽は元禄の頃に見られる。その濫觴を契沖の文献学的基礎づけの努力の功績において、中世における仏教、陰陽道との癒着、歌学や儒学における秘伝、奥義に対する反撥から、客観的、実証的精神を我が国の古代に求めていった点におく。従って契沖、春満、真淵、宣長と次第に国学論が展開されてきた中に、篤胤に到り、国学は更に実践的な面でも古道を求めてきたところに発展性を認めるものである。篤胤は単に古典の実証的な研究に止まらず、一般の学問研究上の方法論としても備置ある方法を明確にし、この方法論に即して、古典の究明に帰納を試み、「道」というものをものした点に獨創性がある。古道とは即ち神道であるが、篤胤は「謂ユル天下ノ大道デ則人ノ道デアル」と述べ、真実の神道とは神国の神国たる国体を知り、神の成し賜えるものであり、これに習い学びて、正しき道を行なうことが誠の道であるといっている。

儒教に対する批判は宣長の方向をひきつぎ儒者は国体や臣道の本義をもたないと言難し、特に仏教に対しては、国風の自然にふさわぬ教法であり、教説においては釈迦滅後のものを論証しているが故に、後人の所産による虚偽虚妄なものであると力説している。篤胤の国学は人間本性に即した道学の確立であり、それは敬神崇祖の生活に実践規範を提示することの必要性を認めている。即ち惟神は自然と合致して、自然とは神習うことであるというのである。

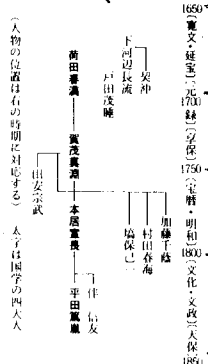
古史に対する研究方法は、一義的な記紀の勝劣真偽の決定を避け、撰録の由縁が異なるものと理解し、記は裏、紀は表と解している。新撰姓氏録、六国史、風土記、律令格式、古語拾遺を重んじ、延喜式祝詞にあつては最上であり、皇国の言霊の正音にのり、大御口づから伝えたものとして、至上の一つとしている。また古史には異説があることから、これを正しく撰び採って一貫した古史を試みたのが古史成文であり、宣長の古事記伝に倣いこれに解釈をしたのが古史伝である。古史伝は篤胤が生前にも、また歿後にそれを引き継いだ矢野玄道にも遂に完成を見ることはなかった。

篤胤の幽冥観は神道にとって重大な示唆をもっている。宣長が「安心無きが安心に御坐



古史傳 稿本 (秋田県立図書館蔵)

国学者系統図



奥津城 (秋田市)



\*「人間の精神を堅固にするためにはこの死後靈魂の行方を明らかにすることが根本である」と『靈能貞柱』にいう

\*『本教外編』  
\*『新鬼神論』

\*荷田春満「創倭学校啓」以来  
国学校の設立は国学者の懇情  
するところであった。秋田の  
和学方は全国でも最も早い時  
期に創立された

\*新野直吉博士稿「神道学一〇  
八号」所収「秋田における平  
田篤胤」

侯」といっているのに対し、死後の魂の行方を明らかにしている\*。即ち、人は死して魂は神であって幽霊、冥魂などといわれて幽冥に帰するもので、この冥府を掌治する神が大国主神であるというものである。霊魂は永久に滅することはなく、霊界は現世から見ることには出来ないが、幽界からは現世の様は明らかに看取し得るという\*。また、再生論もこれには篤胤の独創的なものの一つで、『靈能貞柱』の結論的存在でもある。ここでは冥域の信仰と再生を強調するものである。

篤胤の研究方法はあらゆるものを駆使して普遍原理を立て、在るべき姿の道理を突き進んで明らかならしめねば措かなかったといえる。その上に立って信仰を持ち、実践的な国学を位置づけたのである。この学問と思想は地方神官、武士、郷土、商人、農民などにいたるまで門人五五三人、没後の門人一三三〇人余りという驚異的なまでに全国に受け入れられている。

### 3. 篤胤と秋田

久保田藩での教学は寛政元年（一七八九）に藩校開設より三十六年後の文政八年（一八二五）に和学方の設立によって国学を始めて受け入れた\*。然し、当時篤胤の名声にもかかわらず、和学方関係者は全て本居派で占められていて、平田学は受入れられなかった。まして晩年の篤胤に対する藩の処遇は「敬して遠ざかる」ものであった\*。秋田婦参後篤胤の門人はやはり他に比して断然多く、支持者もいたが、これとても秋田での平田学の開化には繋げなかった。

藩末の文久三年、没後廿一年日によく国学塾ともいえる雷風義塾の設立により、平田古道学が再講されたのである。この後の趨勢は戊辰の役と明治維新により昂まり、没後入門者数もこの時期が最も多い。この中で勤王派の指導の人々は、はっきり門人とは見られないが、平田学を奉じていたことは間違いないと思われる。それは、「本居大人の教へを奉じ」た惟新館設立者吉川忠行の子忠安が雷風義塾設立に協力し講師となり、「醜の篤胤」とまで評し嫌った本居門の高階貞房の子、大山重華も、篤胤を祀る神社の祀官となるなど、平田国学が維神の根本思想として、その中心的役割を担うという当時の状況を無視出来ない程、没後に再び平田国学が開化したことであつたろう。維新後、神祇官の主要構成員となった者は平田派門人であつたことでも理解できよう。

秋田で正しく平田学を継承した者は小野崎通亮と考えられる。

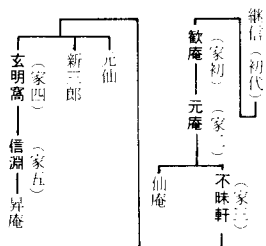
やがて、明治十四年に到り明治天皇奥羽御巡幸の際、祭料が下賜され、八橋日吉八幡神社境内に平田神社が創建された。明治四十二年には秋田県教育会が崇敬母体となり、信



雷風義塾碑（秋田市）

\*『和漢年契』の手書に基く

\*佐藤家系図



\*南部藩家老横沢兵庫宛の書翰に蝦夷地踏査を述べている。

淵を合祀して彌高神社と改称された。大正八年には県社に列格。昭和十八年に従三位の追贈を受けている。

### 三、佐藤信淵の学問と事蹟

#### 1. 生涯と事蹟

信淵は明和六年（一七六九）六月十五日雄勝郡に生まれる。元海、椿園、融齋、桜庵の号があり、通称百祐という。

父祖四世はみな学問を好み、五代に亘って家学を大成したといわれてきた。高祖歙庵信利は医を本業として諸国をも巡り、地質学を究めて『国上経緯記』を著したという。これが佐藤家家学の根本とされてもきた。曾祖父元庵（信栄）はこの志を嗣ぎ、経済学を研考し『氣候審験録』をものし、これが一書は家学の眼目とせられている。祖父の不昧軒信景は農政、山相、開物の学を修め『土性辨』等を著わし、その三男が父玄明窩信季である。信季は専ら家学を成し、『提防溝血志』『培養秘録』等を著わしたと伝えられている。著述中には名称より伝わらないものもあり、本人の著作か疑う説や信淵自身が手を加えたものであるなどの説がいわれている。然し転写による誤りや記憶違いもあったろうし、広く産業学全般に及んでいることもこれから見ても解り、その意味では、家系においても相当の学問的素養があったと考えざる得ない。

信淵は、天明四年（一七八四）十六歳の時、父の客死後遺訓に従い江戸に赴き、宇田川槐園の門に入り蘭学を修めた。これ以前、僅か十三歳にして父に引き連れられ蝦夷地に渡り、帰途は東北各地をめぐる気候や物産を調べたといわれる。学問的素質は血統に由来する天性であつたろう。彼の経済学は井上潜に学び、木村泰蔵及び山村昌水に天文、地理、動植物の学その他、暦算測量等も学んだという。

寛政七年（一七九七）廿七歳江戸京橋に医業を営む。寛政九年（一七九九）廿九歳の時に母を失い、文化四年（一八〇七）三十九歳の時徳島藩に招聘せられて兵学講師となる。この時に『鉄砲窮理論』を著わし、自走火船を考案する。これらにより一気に名声が上り、その門に集る者が次第に多くなった。その後、西洋の兵学、砲術、航海、通商を説くにあたり、時の嫌疑に触れる恐れがあり、上総国大豆谷に退居し、家学大成に志を立て専ら著述に従事して晴耕雨読の生活を続ける。

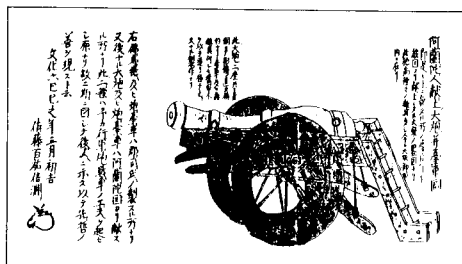
天明三年十五歳の時に父の信季が産業などについて藩の政策を批判するところを当局の



信淵肖像



不昧軒・佐藤家代々之墓（羽後町）



阿蘭陀人献上大砲図

\*『佐藤信淵家学大要』に全文所収。本藩の国勢を股盛に御取建被成候はば小生に勝るや遠し」と一死とひきかえに進言している。

忌諱をうけて役人に追われて郷里を脱出したのに従っていったこともあり、佐藤家は代々藩の施策に対して批判的なことが多くあったらしいし、信淵は開国論者でもあったことなどからか、数度の江戸追放を受けている。これらも真義を求める学者の家系のなすところであった。

文化九年（一八一二）には妻いせが病歿する。この数日後の十二月廿八日には久保藩家老匹田松塘に出した。藩内で墮胎や間引を招く政治に対して激しい忿怒を表した「奉呈松塘匹田君封事」\*は有名である。

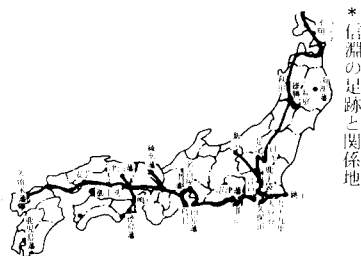
文化十二年（一八一五）四十七歳に平田篤胤の門人となり、また幕府神道方吉川源十郎門に吉川神道を学び、家学根本の哲理の樹立を得た。『天柱記』『天地鎔造化育論』『宇内混同秘策』などは国学的神道哲理が基本となっているといつてよい。文化十三年（一八一六）には吉川家神道講談所建設一件につき町奉行の誤解を蒙り、江戸払を命ぜられ諸国を遊歴する。文政十一年（一八一九）五十一歳に三度の大豆谷に僑居し父祖伝来の宿志達成に精魂をかたむけていった。文政十二年（一八二九）六十二歳には『農政本論』『草木六部耕種法』の著述を完成するに至り、天保三年（一八三二）六十四歳武州鹿手袋に居寓し『土性辨』を訂し、一村を富ましめたのであった。弘化三年（一八四六）七十八歳には前將軍文恭院家斉の三回忌により江戸払いを救免されている。

嘉永二年（一八四九）八十一歳六月より宿疾漸く追り平臥するが、なお筆を擱かず『陸戦法秘訣』『水戦法秘訣』など著書五巻を脱稿し、翌嘉永三年（一八五〇）一月六日八十二歳で歿するまでの間、約百日は酒だけで生命を保ったといわれる。同月二十二日松應寺に葬むられる。明治十五年六月三日に正五位を贈せられた。

諸国遊歴にあつて氣候、天産、風俗、人情を視察するとともにこの間に考究せる学問は多岐に亘り、著述二百五十部七五八巻といわれる中、信淵著作は二百五部五六五巻であるという。辛苦窮乏の間にも意益は旺んで、その気概は常ならず、経国の家学の一大組織を完成した。これをして経世済民の為、農政学を講じて物質的文化の促進をはかり、国民として精神上の発展をなさしめようと畢生をつくしたのである。

## 2. 学問と思想

信淵の豊富な学識と膨大な著作は現在においても驚嘆せざる得ない。「幕末日本の偉人」\*「徳川時代経済学界ノ最後ニ輝ケル学界ノ巨星」とまで称された信淵の思想は、その最大の特徴を、理論的に体系化された学問の構築にあった。その学問の全貌は時代を变革しようとする意識が根底にあり、当時代において卓抜していたといえる。



\*『佐藤信淵』古志太郎著  
\*『佐藤信淵ノ農政学説』中田公直著



松應寺・信淵奥墓（東京都杉並）



旧水堀家土蔵（埼玉県鹿手袋）



西馬宮内信淵文庫（羽後町）



\* 後に斎藤宇一郎も乾田馬耕を導入する当時「秋田の腐れ米」と悪名高いのはこれら束立て乾燥法にも一因があるといっている。信淵の先見の眼はするどいものがあった。

ここに膨大な著作の中から農学におけるものを拾い上げて学問大系を見てみたいと思う。信淵は『復古法問答書』中において農政七部書なるものを上げている。『国土経緯論』『氣候審験録』『土性辯』『提防溝洫志』『培養秘録』『種樹秘要』『草木六部耕種法』であり、作物とその栽培、土壌、肥料、氣候、農政、農事改良といった内容で、極めて論理的で現代にも基本的な考え方としては通ずるものがある。

この体系化されたものには高い評価がされている。栽培の究極目標は生長の原理の認識であるとさえいつている。六部耕種法には、先ず『鎔造化育論』で万物の化育神理、生長の原理を知り、『土性辯』において四十八等の土質を見、『氣候審験録』において二十四番の氣候に適合するものをあてて、さらに三十六種の肥養は『培養秘録』から得るにより成し得るとするのである。ここにおける哲学的構想はその壮大さにおいては現在までも、これを凌駕するだけの書物はないという評価がある由縁でもある。

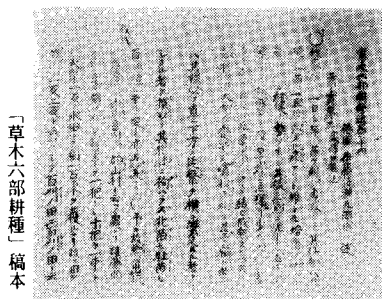
この完成された理論には精神的な裏付けがあったことは伝記からも窮うことができよう。ただ批判的には、理論がすぎる先行しているため実践的な面では農学に関することでは不足ともいわれている。然しこの批判以上に全般の理論の精緻さ、理論大系にあっては学問の方法論とともに学ぶべきものが大であらう。

### 3. 信淵と秋田

『奉呈松塘匹田君封事』は郷里秋田の藩政について厳しい批判をしていることは述べたが、その内容文言を読めば、情勢と愛郷心が込められていることを読みとることが出来る。自分の死と引き替えに論破しているところからも窮える。これと同様に先の『草木六部耕種法』においては、巻十四「需実第三篇・家伝植法」において、稲刈り後に一把づつ杪を左右に分けて田の畔に並べて立てる、島立という乾燥法をとっているが、これは田の水に浸すことになり、翌年の夏には皆腐敗粉砕するので、弁明をしたれども、民の頑なることにより改めることがない。といっている。これによる信淵の感慨は、「出羽の国の秋田領の愚昧なる」とか「秋田米は日本第一の下品なり」というのである\*。信淵の秋田を名差しで述べる、然も著作の上での理論実証例としてあげるところには、やはり、秋田を悪くいうことで、かえって秋田を良くせんがための逆説的な愛情とうけとれまいか。

些細な例だが、これらをとっても、いかに信淵は忌憚のない卒直な物言いをする人物であったか知れよう。容貌が「魁岸」で、志気は「個償」であったという。この強さが反面、秋田の故郷の人々や藩にとっても受け入れられなかったものといえよう。

### 4. 篤胤と信淵に共通するもの



「草木六部耕種」稿本

郡山信淵文庫と生誕碑（羽後町）



雲やれど阿保八幡と名降る所て  
神世の道も身を盡し奉る

手寫本

産靈神社の明神を以て  
世殿爲國ノ蒼生ヲ  
安んずる初皇國ノ靈ヲ  
希タルヲ知ル  
文政二年四月十日  
松尾作樂信州撰

生涯年も大体において同時代といえるこの二者は、その生涯においても秋田で名を上げたる訳でない。当時他の学者同様に中央において大成したという点と、気概のある学問思想への執着は可成似ていると思える。方法論や学問的内容においては異なるが、その底辺にすえた思想と農民や庶民に浸透した点におけることは、国内情勢の不安定という時代も考慮せねばなるまいが、経済上、政治上の変革の時勢に接して、深く熟慮したといえまいか。望郷をおし去りがたかったと思える篤胤も信淵も「我国は万国の祖国」と考えるところは、ある意味で国学上の思想よりも同郷という基盤に思えてならない。

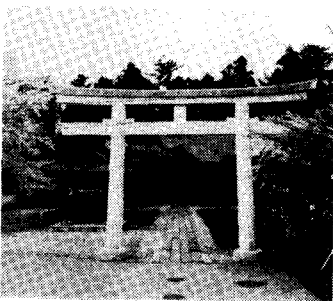
#### 四、国学の現代的意義の私見

国学をするは古道というものを闡明にする古学を攷究していったことによる。その中で篤胤は特に古学によって上代の道は「惟神の道」に「神習う」ことを究めたのである。国学が現代において如何なる意義をもつかといえば、篤胤がとった道を歩むことが一番早い私見を述べれば古学を学ぶこと自体が現代に活される遠いようで近い道である。即ち、上代がいかに高度文明をもっていたかを見極め、且つそこに人間社会の模範的生活観があったかを知ることにより、それにより近づけようとする営みは、現代に国学をする意義にはかならないと考えるのである。

つまり、最初に立ち還えり、根本たる原理を究め、その原理たるものに照らし、生かしていくことである。具体的には、日本人本来のもつ豊かな感性に学び、それを磨いて真実の道を歩むということもあろう。即ち、篤胤の古道から照らせば、敬神崇祖の生活を実践規範的に歩むことである。日本文化の根源は神道にあるという訳である。

文化は個々人の主体的な営みの中から生まれてくるであらうことは、近世国学の発生に照しても基本的に同じ働きがあったことが解る。日本人が日本文化の保持者として如何に生きるかを問う時、日本人として自らのアイデンティティを持つことに必須なものの一つとして国学の伝統がある。国学者の理想が古代に求められる基本的原理を民族の共通的思想様式に高めようとした流れの中に「現在」もあると考えるからである。畢竟日本人の日本文化の保持理論として国学は生きるといえよう。その上で文化や伝統に一つの立場をもつことにおいて、現代に、より積極的な国学をする意義があろう。

註 本稿は秋田県生涯教育テレビ講座における製作番組原稿として作成したものに加筆訂正をしたものであることをおことわりしたい。



両大人を祀る彌高神社

## 彌高神社外伝

渋谷 鐵五郎

### 彌高の神殿

神霊の鎮まりたもう彌高のやしろにぬかずくこと私は、神殿にまつわる遙か悠遠なる昔日の息吹きに想いをかられるのである。

そもそも彌高の神殿は旧秋田（久保田）藩主佐竹家の主護神（氏神）であり佐竹一族はもとより、藩士に深く尊崇された武人の神「正八幡宮」の神殿であった。

八幡の神は、古来このかた弓矢の神として武人に尊信されたことはいうまでもなく、また佐竹家においてもその例外でない。

### 正八幡宮常陸に勧請

清和源氏の子孫佐竹家においては常陸時代に、第一の守護神として再度にわたり八幡の神を勧請した。その第一は初めて佐竹の苗字を称号とした新羅三郎義光の孫昌義（①常陸太田では佐竹氏初代、②秋田では佐竹氏三代）が京都の石清水八幡宮から勧請したという

大八幡宮。その二は佐竹義人（佐竹昌義の子孫①では十三代、②では十四代）が鎌倉の鶴岡八幡宮から勧請した小八幡宮（後に小を正に改めた）である。

この正八幡宮の勧請にあたつて義人は、鎌倉鶴岡八幡宮の神女鶴（つる）を介して八幡宮の御神体なる絵像を写しとり、模写の像を八幡宮に収め真像を領国常陸に勧請したという。

神女鶴は義人の内意のもと勧請の御神体なる御絵像を守護し、義人に従つて常陸の太田に移った。かくして太田城内に正八幡宮が鎮座し、鶴は御神式御祭事等の神事を悉皆主宰し佐竹神人の座を仰せつけられたという。

また鶴は義人の内意について「御密々に御深慮の次第を仰せ含められ」その内容は「口傳をもつて一家相傳、御神祕第一の儀に候て白地（あからさま）に御書き顯（あらわ）し難い」と記し、その実態を幽遠なる神秘の雲につつま

でいる。

正八幡宮の勧請された年月は①応永二十三年（一四一六）とか、②永享三年（一四三一）という。①の場合は佐竹義人十七才、②の場合は三十二才である。何れの年月か、定かでない。義人は応永七年（一四〇〇）生れて、上杉家から賀養嗣に入った人で応仁元年（一四六七）十二月二十四日、六十八才で没した。

鶴は「義仁、寿、被成候間、鶴御前に立、弘申也、依之御当国の神職之上に被成候者也」と、文明九年（一四七七）十二月十三日の「鶴子文書」に記録してある。この場合の「寿」は「ことぶき」、寿賀、すなわち長が生きの祝賀と解される。義人は六十八才で没したから、寿賀の祝賀は還暦の六十一才、すなわち寛政元年（一四六〇）の年にあたる。

鶴は女系をもつて、代々正八幡宮の神事を継承した。

### 正八幡宮の秋田遷宮

佐竹義人卒して一三五年後の慶長七年（一六〇二）、関ヶ原の駆け引きが災いして佐竹義宣は秋田に国替えとなった。この年の九月義

宣は、土崎の湊城に入った。しかし安東（秋田）氏の湊城は狭隘なので久保田の地に新城の工を起し慶長九年八月二十八日竣工した城に移った。これが佐竹藩二七〇年の治所久保田（秋田）城となるのである。

佐竹家の転封に従い、その氏神なる大・正八幡の両神霊は、佐竹家の移転した翌年の慶長八年常陸を出立する。神霊は看抱（鶴の夫）飛田与右衛門と神主小太夫（近谷氏）に守護され、水戸より陸路越後に至り、舟にて土崎湊へ四月五日夜着船し、土崎神父（日吉神社の神主）方へ宿り、同宅御納戸に神霊を仮の安置をし、後に御城裏（土崎湊城）に仮の御神殿を造営し滞りなく長途の遷宮を終えた。

慶長九年八月末、佐竹義宣の久保田移城により正八幡の神霊は、新城内に仮の御堂をつくり移った。さらに十二月晦日中城へ遷宮し、ここにとどまること三年、慶長十二年（一六〇七）二月、三の丸山の手の別郭に明治の初めまで鎮座した。

山の手の別郭は、佐竹の一族にして重臣である石塚大膳の屋敷であった。この石塚大膳を城下東根

佐竹氏略系

①源義光—義業—昌義—忠義

隆義—秀義—義繁—長義—義胤—行義—貞義—義篤

義信—義盛—女—義人—義俊—義治—義舜—義篤—義昭—義重—義宣

②源義光—義業—昌義—隆義—秀義—義重—長義—義胤—行義—貞義—義篤

義宣—義盛—義人—義俊—義治—義舜—義篤—義昭—義重—義宣

小屋町に移し、その跡地に正八幡宮と、これも常陸から遷ってきた稲荷社が遷ったのである。八幡宮が鎮座したので、この地は八幡山の別郭とも呼ばれた。正八幡宮は、神女鶴と神主近谷小太夫によって神事が奉斎された。

神女鶴と神主小太夫

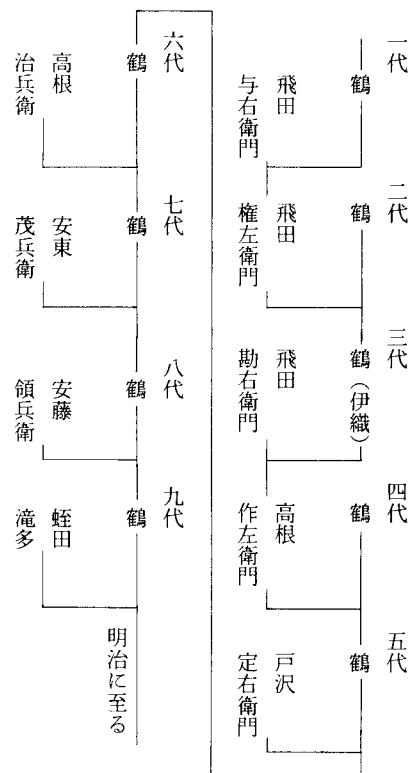
これまで正八幡宮の神事を掌る神女鶴と、神主小太夫について断続的に描出したが、その大要について述べておこう。現在掌中にある資料を駆使しての記述には、少なからずの紙数を要するので簡略に誌そう。

さて右の神女と神主両者の上祖は、ともに鶴岡八幡宮の社家であったという。神女鶴については、既述の如く鶴岡八幡宮の神女であ

り、また社家の女ともいう。また源頼朝以来の女系神女ともいい、数々の説話がある。しかも常陸にあっても、秋田においても鶴という家の女系をもって神に仕えた。神女鶴家の女系とは代々出生の女子をもって家系の継承者とするが、智とりをしての家系でなく鶴自身、士分の家に嫁となり武家の奥方という身であった。したがって身はひとつだが①は鶴家の当主で正八幡宮の神女、②は武家の妻女。つまり①は八幡の神事のみを掌る家、②は婚家の人、つまり主婦。要するに重複した境涯にあった。鶴家の苗字は鎌倉にあって高根氏、常陸に移って飛田氏、秋田に転じて飛田を続け、明治に至った。

秋田に移ってからの鶴家の代々

は、次のように続いた



女系といっても、それは立前で必ずしも女子が生れるとは限らない。そのときは、出生の男子に娶った嫁をもって後継者にした。一代目鶴は、女子なく息子の嫁を継承者とした。二代目鶴は女子二人より子がなく、長女を三代目とし勘右衛門を尊にとり武家の飛田家を継承したが、男児生れて間もなく勘右衛門は逐電してしまった。そこで鶴の妹に尊取りし、武家の飛田家は代を重ねた。三代目鶴の家庭は夫の失踪により断絶となり一子作左衛門は浪人となる運命にあったが、母親（三代目鶴）の力によって三人扶持で藩に仕え、苗

字を遠祖の高根を用いた。その嫁が、四代目鶴を継承。以下は代々実子（女子）をもって、明治へと続いた。  
神主小太夫（近谷）家の祖先も鶴岡八幡宮の社家に生れ、佐竹義人の八幡勧請に社家として常陸に赴き、次いで秋田に移った。したがって小太夫は、鶴と表裏一体となつて八幡の神事に勤めた間柄である。

正八幡宮の神霊と神殿の変遷

佐竹義宣の国替によって正八幡宮は、久保田城三の丸別邸に鎮座したことは前述した。先輩格の大

八幡宮は久保田城下外町の四十間堀町に移ったが、元禄五年（一六九二）三月二十八日、寺町の一乗院境内に移転した。ところが七十五年後の明和四年（一七六七）六月四日の外町大火に一乗院ともども類焼し、ともに城内の正八幡宮境内の空地に移り、やがてそこにそれぞれの社殿、寺院を建立し定着する。大八幡の社殿は安永四年（一七七五）六月十七日に竣工し、遷宮した。正八幡、大八幡の両宮は、以降しばしばの修復、普請を重ね、現在の建物は次の年代の普請という。

大八幡宮、文政初期（一八一八～一八二〇）

正八幡宮、文政二年（一八一九）四月朔日

（秋藩紀年・鶴家文書）。

時勢は大きく進み慶応三年（一八六七）十月十五日、將軍徳川慶喜は大政を奉還し、次いで十二月九日將軍を辞し徳川幕府は終末を告げた。

しかるに翌四年正月三日鳥羽・伏見（京都府）に戊辰の役が勃発。徳川軍は敗れ、徳川慶喜は江戸城を明け渡し蟄居謹慎。旧幕府の徳川家は潰え去ったから戦いは終つ

たはずだが、薩長は私怨色濃厚なる会津・庄内藩の討伐を強行し、会津若松をはじめ奥羽越の各地を戦火のちまたにさらす。七月、この戦火は秋田に飛火し秋田戊辰戦の開戦となる。戦闘は、①東軍と②西軍をもって戦った。

①の東軍とは薩長の強行する会津・庄内討伐に反対する奥羽越の各藩によって結成した攻守同盟軍（同盟軍）。

②の西軍とは薩長兵を主力とする連合軍（連合軍）。

秋田（当時は久保田）藩は紆余曲折を経て西軍に連合した結果、同盟軍（仙台・庄内兵主力）の大挙する進撃を受け藩内の三分の二が戦場と化し、河辺郡まで敵は進攻し久保田城累卵の危機にさらされるに至った。よって藩主佐竹義堯の出陣となり、これに続き九月六日正八幡の神霊は河辺郡戸島村に出陣した。九月八日、明治と改元。九月十日、椿台の大会戦。このとき平尾鳥村山嶽に白旗數十流あらわれ、敵軍は大いに恐れ敗走したという。彼我ともに正八幡の神威におそれをなしたと、語り伝えられている。九月二十七日庄内藩の降伏をもって終戦。十月九日、

正八幡は久保田城内に帰陣した。鶴、近谷はこれに従った。

明治四年（一八七一）一月十三日、藩名久保田は秋田に改められ、七月十四日秋田藩は廃され秋田県となった。

廃藩により秋田（久保田）城内にあった社寺は、庇護者なる藩を失い縮小廃止となる。藩主佐竹家の篤い信仰のもとにあった御城内三社（正・大両八幡宮、稻荷社）は、同五年四月十三日正八幡宮内に合併祀され、八幡神社となり大八幡宮と稻荷社の社殿は空殿となった。六月二十九日秋田城地は陸軍省の管轄となり、藩制時の建造物は追々城地外へ撤去することになる。翌六年十月三日、八幡神社は県社に指定された。

同十一年十一月、かねての予定により秋田城地に建つ神社（八幡神社と空殿となっていた旧大八幡宮の社殿）は東根小屋町に買収した旧石塚家老（城地から移った大膳の子孫）屋敷に移転した。（寺院は数年前に立ち退き、空殿の稻荷社は郡部へ売却した）

この月に東根小屋町に秋田神社が創建され、空殿の旧大八幡宮の鎮座した建造物をもって社殿とし

た。同十三年七月十九日、秋田（久保田）城全焼。同二十二年四月一日、秋田市発足。翌年六月秋田城地は国から旧藩主佐竹氏に縁故払下げとなり、同二十八年千秋公園に生れかわった。

同三十二年五月秋田神社は、千秋公園（本丸地）に移転。同四十年十二月二十四日八幡神社と秋田神社は合祀となり、八幡神社の神霊は秋田神社に遷り八幡秋田神社と改称した。これにより八幡神社の社殿（旧正八幡宮の神殿）は、空殿となる。

同四十二年十月、東根小屋町に彌高神社が創始され空殿となっていた秋田神社の社殿をもって、その神殿とした。彌高神社の源は、明治十四年秋田郊外八橋に創建した平田神社（祭神平田篤胤）を、同四十三年十月東根小屋町に遷し、同時に佐藤信淵を合祀し彌高神社と社名を改めたことは人の知るところである。その経緯については本「研究所報第一号」に詳しい。大正五年四月、彌高神社は千秋公園（二の丸）に奉遷され、同八年二月県社に列した。昭和二十八年十月五日神社の本殿、拝殿は秋田県重要文化財に指定された。な

お神殿は移築の際、柱に腐蝕があり約四寸切りつめたという。真に惜しいきわみである。

城内にあった両八幡宮は、時の流れにより城地を去ったが、ふたたびかくして故山にかえた。やはり、ふるさとの地は神域の地であったのである。

### 神女鶴家と神主近谷家の行方

明治維新の奔流によって代々正八幡宮の神に仕えた神女飛田鶴と神主近谷益磨は神職を離れ、明治の浮き世を渡る仕儀とあいなった。

明治元年十一月十日、近谷家十一代益磨は寺内に建造中の招魂社の神主に任命されたが、翌二年六月招魂社の神主は藩主ということとで、同社の守護となった。同八月招魂社竣工。翌九月、招魂社境内に新築した藩舎に近谷益磨は岩城村（秋田市）より転居した。ところが明治五年八月、神官世襲の禁止により益磨は招魂社の守護を解かれ、岩城村の自宅に余儀なき自適する次第となった。ときに益磨六十九才。

明治五年二月一日戸籍法（壬申戸籍）の施行により九代目飛田鶴は夫である蛭田滝多家の戸籍に編

入となり、神事の家としての飛田鶴家は戸籍上存在しなくなった。

同四月十三日御城内三社の合祀により神事は神官一人だけとなり、歴史ある鶴家の御宮守は廃止となった。こうして鶴は蛭田家の主婦となったが、数百年におよぶ鶴家の誇りある家歴を惜しんだ。

鎌倉以来連綿、鶴の名をもって誇り高き神女の地位にあり、常陸においては神人の座上に位置したという——こうしたことを念頭に秋田における三代目鶴は次のように書きのこしている。

#### 御神事の節 社参仕候には

先年は乗物にて打物までも為指候よしに候へ共 近年は相省き歩行にて社参仕候

鶴家筋儀は軽輩には無御座く曾て巫女等の類には無御座候

単なる神楽や祈禱巫女ではないと、鶴は格式の高さを誇示している。この三代目鶴は、鶴姫様御名に相障るということで「伊織」という名に改めたが、享保三年（一七一八）九月十六日、藩の神社奉行から「差し障りが解けたから昔の名、鶴に改めてよい」との通知を受けている。差し降りのあったという鶴姫とは、おそらく佐竹家

の姫君であろう。

元文三年（一七三八）二月二十七日、六代目鶴の頃、藩の寺社方から「鶴の肩書を八幡巫女と改め、縁組等は諸士と勝手に致してもよい」との仰せ渡しを受けた。家格の高かった証左の一端を物語っているようである。

鶴の御宮守解任となった翌日、その長男蛭田武治は、八幡神社の祠掌に採用された。武治は慶応四年（九月八日明治と改元）四月二十六日、二十才で妻を娶った。妻は佐竹藩の重臣渋江内膳の四女ミツ（十六才）である。

明治十二年五月二十六日、鶴の夫蛭田滝多が没した。この三年後の十五年三月、鶴は歴史ある飛田鶴家を城地北の丸新町に再興した。ときに鶴、五十六才。

鶴（戸籍名はツル）は市井の人となっても「口傳をもつてする一家相傳の神事」を黙して語ることなく、十二年後の明治二十七年九月三日、六十八才をもって死去した。神秘に閉ざされた鶴家相傳の神事は、後継者のないまま絶傳してしまった。同三十二年六月二十一日、相続者がいないため鶴家は絶家となった。

鶴家の菩提処は鱗勝院、蛭田家は声体寺。鶴の霊位は、両寺に宿っている。代々の鶴は、このように鶴家と婚家の菩提処に、それぞれ霊嗣されたようである。鶴の死去により鶴家は絶えたが、鶴の子孫は蛭田家として存続した。

鶴の長男武治は明治三十一年一月一日、四十九才で没。その長男新助は陸軍に志願し、陸軍歩兵曹長に進んだ。日露戦争に出征し、明治三十八年三月七日奉天に戦死した。二十九才。新助の妻タカは、井出三郎の女。タカの兄大衆は東海林家の養子となり、その長男が太郎。流行歌手の巨星として一世を風靡した、あの東海林太郎である。新助の後嗣信貞はアンゴラ兎の採毛加工に従事していたが、昭和十九年八月二十七日、ブーゲンビル島に戦死した。三十六才。その長男千秋氏は、横浜市に居住している。

なお鶴家所伝の古文書（約三六〇件）は同家の絶家後、蛭田家に所蔵されてあったが、同家の県外転出の際、鶴にゆかりある神職の家に譲り渡した。

岩城村に自適の近谷益磨は性不羈磊落にして俳諧を能くし、成林

と号した。その教を受くるもの近在近郷から日に多くなり、遂には大久保、一日市、五城目、能代、桧山、男鹿、仙北、院内銀山等にも斯道の点者となり巡遊した。明治十五年十一月、大曲より土崎に帰り間もなく病氣となり、翌十六年十二月九日、八十才の天寿を全うした。

益磨は仙北郡角館の神明社神官正六位鈴木淡路守重堅の次男として享和四年（一八〇四）二月一日文化と改元）一月十日角館に生れ、近谷家に養子となった人。紀行文作家として不朽の名著を秋田に残した菅江貞澄は、文政十二年（一八二九）七月十九日、この鈴木家に七十六才で没した。ときに益磨は、二十六才であった。

貞澄は文化八年（一八一）六月四日、近谷家八代上総正宗光が名刀を所持すると聞き、岩城村に宗光を訪ねている。その刀は近谷家が常陸にあるときからの家宝で、名匠の誉れ高い刀工が出雲大神宮（京都府亀岡市）に畢生の会心作を授け賜へと、神助を祈願し身魂を傾けて鍛造した刀で刀上の靈魂が乗り移っていると伝えられていた。この刀は、明治となってから

益磨の代に失ったという。

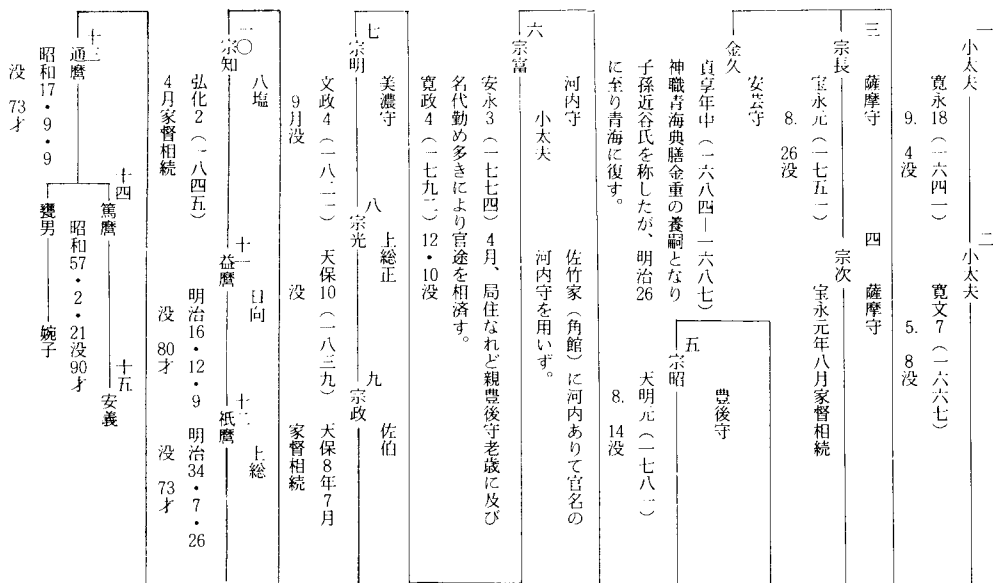
益磨の長子祇磨は慶応二年（一八六六）二月神道裁許（官途）状を取得し官名を上総と称した神職（社掌）であったが、役場の書記を兼務した。明治三十四年七月二十六日没、七十三才。祇磨の嗣子通磨は教員を職とし、上新城（秋田市）、馬川（五城目）の小学校校長を約二十年にわたって奉職した。昭和十七年九月九日、七十三才で没した。通磨の長男篤磨は、父と同じ教職員。在職三十五年、この間に南秋田郡内各地の小学校等に奉職し、約二十校の校長を勤めた。昭和五十七年二月二十一日、九〇才の天寿を全うした。

篤磨の子女は、第一子の長男を筆頭に続けざま五人が夭逝した。あまりの不幸続きに恐れをなした篤磨は、ちまたのいわゆる神様（巫女）にこの旨を訴えたところ、次のように神託があった。

近谷家傳來の名刀を失ったため、その刀の怨霊が子孫に祟りをなしている。すみやかに刀の霊を供養せよ、と。

失った刀とは、曾祖父益磨の失った刀のことであった。篤磨は巫女の口述にする神秘的な手順をもっ

# 藤原姓近谷氏略系



※ 八・九・十代の三者は親子相統でなく兄弟のようである。十一代は養子。

八幡宮の御祭神は、大菩薩、平田篤胤、佐藤信淵、日吉八幡神社境内地に祀った平田神社で、その後市内東根小屋に奉遷。秋田県教育会でも平田大人、佐藤大人御二柱を祀らんとし、市

▲「御書例立申請諸社御書」  
鶴筆

て草木も眠る深夜、極秘裏に神崇を慰霊したという。篤磨の嗣子安義氏は、七番目に生れた一人むすこで秋田市に住んでいる。

### 所縁

所縁つまり彌高神社との「ゆかり」を述べたいがため、思わずえんえんとつたない文をつらねてしまった。

神社とのゆかりと申しても、決して祭神との縁故ではない。冒頭に述べた如く祭神の鎮座する神殿にまつわる所縁なのである。

近谷家十三代通磨の二男、つまり十四代篤磨の弟惣男（みかお）は池田家の養子となった。その惣男の二女（婉子）が、私の妻である。夫婦は二世という。二世という絆をもって私は、近谷家の由緒にひかれ同家の資料をめくった。

近谷家は約一六〇年前の昔から明治二年までの五〇年間にわたり第八代目の上総正宗光、佐伯宗政八塩宗知、日向益磨と連綿し、この彌高の神殿にあって神女鶴と神事に勤仕した。

近谷家の来歴調査により、神女鶴子と、近谷は常陸以来からの不可欠な間柄なるを知り、いきおい鶴家所傳の鶴文書を耽読する。

鶴文書は断続であるが、慶長から明治初年の鶴家神事廃止まで記録されてある。そこには、鶴女直筆の表裏にわたる誇りや苦悩が書き連ねてあるのに驚嘆。百年以上の古い文面に鶴女の人柄がにじみ、いつしか鶴女の直話を聞いているかの錯覚にひたることしばしば。神女鶴と神主近谷の概況を記すに至ったのは、こうした経緯による。

彌高のやしろを想察し、またその神前に詣でると私の脳裏には、曾ってこの神殿に朝な夕な神に仕えた神女と神主の姿が彷彿と頭われ、親しく昔日を語るかの情景にひたり、俗事を忘れ安堵の境地に達する。たとえそれが幻覚であろうと私にとっては、何にもまさる得難い極致のときなのである。

（本所研究調査員）

## 佐藤信淵大人追贈余談

桐原善雄

郷土の生んだ大偉人、平田篤胤大人・佐藤信淵大人御二柱を祀っている彌高神社は名社として知られている。

御祭日、正月、厄祓、年祝、七五三祭等は列をなし、参詣者数拾名と常に絶えずに至ったことは御神徳の賜である。

御祭神の御事績は数多く、学問は共にすぐれていた。世に医術について余り知られていないが、医術も学問同様すぐれていたと伝えられている。

平田篤胤大人は小児科、佐藤大人も小児科に加えて外科にすぐれていたと逸話は伝えられているところから、御祭神を学問の神、小児の守り神と崇められて参詣者、年と共に多くなりつつあることは、御霊験の灼なるゆえんか。

彌高神社の前身は、市内八橋の日吉八幡神社境内地に祀った平田神社で、その後市内東根小屋に奉遷。秋田県教育会でも平田大人、佐藤大人御二柱を祀らんとし、市

内手形山に手形山神社建立を計画し、場所、資金等着々と運動を進めていたのを取りやめ、平田神社に佐藤大人を合祀することに変更し、社号を彌高神社と改めた。社地狭いところより千秋公園の現在の美地に奉遷となる。

平田大人の御事績はすぐれ、学者、郷土史研究家等によって多く述べられているから、佐藤大人追贈にまつわる余談について述べてみたい。

佐藤大人は、父祖五代続いた佐藤家学を土台に、研究と実践、国内を余すところなく巡歴、時には拾数藩より藩財政立直しについて招かれ、これに参加している。

佐藤家学は佐藤歆庵に始まり、元庵、不昧軒、玄明高と五代。三代目の不昧軒は御事績を高く評価され、大正十二年に追贈従五位を賜った。

佐藤大人は農政学にとどまらず、経世学兵学と巾広く、時には平田大人門人となり、平田神道を研究、



従って佐藤大人の著書に平田神道の精神が生かされている。「宇内混同秘策」等はい例である。

佐藤家学は現在も脈々と流れ、息吹いている。秋田経済法科大学の前身、秋田経済大学では佐藤大人を建学の精神としたとして、平田大人後学、国学者山田孝雄博士の高弟で御祭神研究家、小島好治氏を教授に招き、信淵研究会を組織し、数々の成果を納め、郷土の発展、文化の向上に寄与していることは世に知られている。

本所研究調査員、平田大人後学、高梨神社宮司川越重昌氏は教職の傍ら、佐藤大人研究を進め、数多くの力作を有名書店より発行。教職を退いた今日も研究を続け、講演、著述に忙殺され、特に火葉の研究に全力投球していると聞く。いわば佐藤大人研究に半生を捧げての研究したことになる。これは常人のなせる業でなく、只々敬意の目をみはるのみである。このように佐藤学は奥行深く、巾広く、魅力もあって心を引きつけられる。従って学者毎年にも多くなりつつあることは如実に物語っている。

追贈上申に至った動機、平田神社建立の真相について判らないこ

とが多く、これを解くためには、資料と人物像より術はない。幸い秋田市内追分に羽生氏熟の孫、氏貞氏が在住している処より御協力を得て、関わりのあると思はれる資料類を探したけれども、発見に至っていない。只資料に近い物、人物像より臘乍ら私しなりに判りつつある。

羽生氏熟は幼にして学問に励み、秋田藩当時、右筆として仕え、維新になるや県書記官に補されている。又参事官ともなり、時には千葉県、埼玉県より請われ、各二年間出向し数々の業績をあげている。後に県議会議員や短期間の秋田市長に就任と、巾広い行政官であった。

特筆すべきことは、秋田藩士、授産事業の秋成社の結成と組織運営にあった。開懇、養蚕、機織等と巾広く、將軍野、大張野の開懇は有名で、いわゆる旧藩士の失業救済を目的としたものだけに、参加した旧藩士は一三二名の多くに及んでいる。機を見て敏なる氏熟は明治九年六月十四日明治天皇御巡幸の下見に来ていた大久保内務卿を山形県本合海村（現在新庄市）に尋ね、御巡幸と旧藩士失業救済

事業の政府資金の援助方を陳情した。御巡幸については宮城行在所に於いて御沙汰あらせられると論された。

秋成社の精神は佐藤大人の農政学、経世学、いわゆる佐藤家学を精神としていたようである。早くより平田大人を崇めると共に佐藤大人を祀り、朝夕祭祀を怠ることなかったと伝えられている。

羽生氏熟は旧藩時代、石山正なる私熟に通い門人となる。秋田藩に於いて勤王、佐幕の両派に分れ論議を重ねた結果ついに勤王派に属した。師の石山正は佐幕派で側用人であつて、平田大人を信奉する氏熟と常に口論絶えることなく、ついに石山塾を去る。以上の通り秋成社の結成、私塾を去った事等よりして、佐藤大人、平田大人を崇敬したと史料される。色々と絞ってみると、追贈上申の時期、平田神社建立願上等は御巡幸に的を絞ったと思はれてならない。

明治天皇奥羽御巡幸は三回であらせられたが、一回目は明治九年二回目は明治十四年、三回目は明治三十四年、秋田、山形には明治十四年一回のみに終る。氏熟は宮城御巡幸に随った大久保内務卿よ

り、山形県本合海村に於いて御沙汰を待てと申し渡されたので、大久保内務卿に随い各地を視察して同年六月二十五日宮城行在所に於いて、秋田に近年中御巡幸の御予定になっていると論されて帰庁す。同年七月六日、秋田町旅館に於いて（資料には旅館名記載なし）

石田県令立会のもとに氏熟は再び、旧藩士救済事業に対する政府資金借り入れの件と、御巡幸について陳情した。授産事業資金の借り入れについて一応の内諾を得、又御巡幸についても近年中秋田御巡幸の確約を得ている。実は一回目の御巡幸乃ち明治九年の御巡幸の際、秋田、山形も一応の予定に組れていたようであつた。当時は旧藩士の失業者市に溢れていた模様で治安不安定最中の御巡幸、秋田県生保内附近に旧藩士の不穩の動きの情報あつて変更になった模様である。不穩な動きは密偵調査の結果事実無根と判明す。

秋田御巡幸の際特旨を以て、平田大人奥津城に、東園侍従を遣され、御下賜金賜っている。翌九月十七日八幡神社臨御、羽生氏熟組織結成した秋成社機業場に臨御あらせられた。

氏熟筆「建白」書（表は信淵肖像）

口傳  
猶右口傳可面授白

馬

平田篤胤

文政七轉年十二月

板倉織部正殿

耶ソハカ  
タルマイタツタボタナシオル  
マヤ天狗  
数万騎ソワカ  
飛鳥印 大指ヲ交ヘ餘リ  
ノ指ヲ開キ立  
テ招ク

## 天七鬼神之法

貴キ社ノ神木カ又ハ年経  
タル靈木ノ一ヲ切テ二寸八分  
二不動遵像ヲ手ヅカラ  
作り其本木ノ穂上カ根  
本ニ埋メテ三七日ノ間オクヘ  
シ其像ニ付ル札ニ曰

〱 仰願是尊神神力神  
使開眼成就神通自  
在ナラシメ給ヘ

右二十一日ノ間木ノ元ヘ行  
ク宅ニ壇ヲ飾ルカシテ供  
物ニハ

桃木 スゲ 粟 ヒエ  
キビ 黒大豆 赤小豆ナリ

皆粒ヲソロヘテ供スベシ  
香花燈明尤モ備フヘシ  
外縛ニ中立合印ニテ

天狗自在神通ソハカ

愛宕山大権現

象頭山大権現

高雄山大権現

富士山大権現

白山大権現

虚空法身不動明王

天狗天狗天狗阿日

天狗飛行自在神通  
ソワカ  
大海印 内縛シテ家中  
ニチラス

噫ダイクラダッタオルマヤ  
天狗数万騎ソワカ  
如此ク二十一日ノ間修行一日  
二度ツシテ彼ノ像ヲ本尊  
トシテ此法ヲ成就スル輩

ハ天地鬼神ニ方便ヲ得  
テ自由自在ナリ一切ニ用ル  
ノ妙術中ニ天下無双ノ  
大事可重可秘也

サテ桃ノ木以下六色ノ供物  
ヲ黒焼ニシテ密瓶ニ入  
祈願ヲ込メテタクハヘ置キ  
一惡人ヲ寄マシキト思フニ道  
ニ時リ

一敵人ヲ損サスニモ同シ  
一離別ニハ夫婦ノ間ニ捻ル  
一盜人ノ除方四方ニ時ク  
一地論ニハ境ニ埋ム  
一鼠ノ荒ルハニ飯ニ交ヘテ  
食スコトシ

一勝負ニハ衣服ニ捻ル  
一勝負ニハ衣服ニ捻ル

一他人ノ愛敬ニハ履物ニ捻ル  
一病ヲ愈スニハ藥ニテモ食  
ニテモ捻ル

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

一我カ愛敬ニハ我分ニ捻ル  
一人ノ口留ニハ井ノ中ヘ入ルハ  
水天咒ヲ唱フベシ

〆シウラシツテイ  
ソワカ  
一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

一立癪

板倉織部正殿下  
奉

## 密法修事と平田思想

平田思想にとって玄学研究が單なる補足的分野ではなかったことを、小林健三氏が『平田神道の研究』で論じた。玄学研究の分野が全著作中でも可成の部分の占めてゐることを指摘しながら、篤胤の晩年が特にそれに注がれ、儒經として神典の次に位を与えたとするこの玄学の位置づけは、根本は常に皇神の道であり、例えそれが儒意や仏意を借りても解釈できるとするものである。玄学の問題については従来あまり注視するところではなかったが、小林氏の指摘する方向は極めて興味深い。

ところで篤胤の著作の中で『密法修事部類稿』四卷がある。これは『菅能屋先生著述書目』に、密法修事部類 十卷

此書は、真言秘密の諸儀軌を普く見て、部類を分ち記せる物にて、其は皇朝の神事、及び玄家の修事にも、其法の混雑せる事ある。其惑ひを開かむ為に、勞き記されし物なりとみえる。十卷を起す予定であつ

平田篤胤

たと思えるが、現在残されているのは真言系密宗の経文儀軌類から抄書したもので、考察らしいものはあまり加えられていない。これも平田思想とどのような関わりがあるのか。恐らく玄学研究に伴なう思维的関連があると予想される渡部金造著『平田篤胤研究』に依れば、篤胤は我国の古代には医薬と加持祈禱を併用したとすることにより、「篤胤は祈禱を行った」という。現に篤胤は晩年秋田藩主の病氣にあたり医薬の処方をする一方、十七日間の祈禱をした事や度々平田日記に「痔疾ノ咒禁スル」と禁厭のことが見えてくる。茲にとりあげた「神行之大事」や「天七鬼神之法」はそれらの一環を示すとみてよい。こうしたものは門人や極く特定の人々に所謂秘伝として伝授されている場合が多々みられる。例えば、嘉永元年に「平田大学先生口伝」として禁厭の法を版木で摺ったものを、川尻総社神主が発行している。同類の秘伝口伝文書が方々にあると思われ、その背景や伝書を今一度集成する必要があると思う。

これらは要するに玄学研究の線上からはずれものではないであろうし、真言密教研究が我国古伝、古意がその法術を伝えるものとし、実践的な神学面を形成する一助としたと考えられよう。

(齊藤壽胤)

## 研究所記事

- \* 59・04・29 平田篤胤佐藤信淵両大人関係資料展 彌高神社齋館 十日間
- \* 59・05・01 「平田篤胤大人関係遺蹟」地図・解説書発行
- \* 59・07・13 「佐藤信淵大人関係遺蹟」地図・解説書発行
- \* 59・11・29 第三回調査委員会
- \* 60・04・28 平田篤胤佐藤信淵両大人関係資料展 彌高神社齋館十日間
- \* 60・07・11 第四回調査委員会
- \* 60・08・25 佐藤信淵大人関係遺蹟巡見会 羽後町
- \* 60・11・24 学術文化講演会「日本文化を探る」上田賢治文学博士 彌高会館
- \* 61・04・27 平田篤胤佐藤信淵両大人関係資料展 彌高神社齋館 十二日間
- \* 61・07・10 常設小展示開設 彌高神社齋館
- \* 61・08・08 第五回調査委員会
- \* 61・11・24 彌高叢書第一輯発刊
- \* 62・03・28 第六回調査委員会
- \* 62・04・26 平田篤胤佐藤信淵両大人関係資料展 彌高神社齋館 十五日間
- \* 62・03・01 彌高叢書第三輯発刊
- \* 62・08・08 第七回調査委員会
- \* 62・09・20 学術文化講演会「万葉のこころ」桜井満文学博士 彌高会館

## 研究活動

- \* 研究発表「白川派神拝式と平田篤胤」齊藤壽胤 59・03・15 研究調査委員会研究会
- \* 研究講話「平田篤胤佐藤信淵両大人研究について」齊藤壽胤 60・05・02 彌高神社例祭
- \* 講演「平田篤胤・佐藤信淵―その人と思ひ」齊藤壽胤 60・07・10 秋田市東部公民館史蹟を学ぶ会
- \* 研究講話「佐藤信淵大人の発想」齊藤壽胤 信淵大人生涯祭
- \* コミュニティカレッジ講義「国学の思想」六回講座齊藤壽胤 60・01・12 03・09 秋田県生涯教育センター
- \* 研究講話「秋田国学の道統」齊藤壽胤 61・05・02 彌高神社例祭
- \* 講演「平田篤胤の思想と晩年」齊藤壽胤 61・08・07 秋田市東部公民館明德地区寿会
- \* 「佐藤信淵大人の二人名跡」彌高叢書第三輯・渋谷鐵五郎著 61・11・24
- \* 生涯教育テレビ講座近世文化シリーズ「平田篤胤と佐藤信淵の学問と事蹟」齊藤壽胤出演 AKT秋田テレビ放送 62・02・28
- \* 「織瀬夫人伝」彌高叢書第一輯・伊藤裕著 62・03・01
- \* 研究発表「篤胤の農本的思想面」齊藤壽胤 62・03・26 研究調査委員会研究会
- \* 研究講話「平田篤胤大人の文体について」齊藤壽胤 62・05・02 彌高神社例祭

## 新収資料

- \* 研究講話「信淵大人と秋田農業二者―信淵大人の農政字の影響と秋田」齊藤壽胤 62・07・10 信淵大人生涯祭
- 平田篤胤和歌 短冊
- 神拝詞・平田延胤書 卷子
- 本居宣長肖像 軸
- 賀茂真淵肖像 軸
- 平田篤胤肖像 軸
- 鈴木重胤書 軸
- 版本 十字号葉培例
- 培養秘録
- 土性辨
- 古史徴
- 古史成文
- 川越重昌研究調査委員会寄贈資料概要目録
- 図書資料 洋装本 五八八点
- 和装本 二四〇点
- 寒松館稲川得齋先生遺蔵書籍 一四二点
- 同 目録 一点
- 古文書 一点
- 稿本複写資料 二二点
- 研究・調査ノート 一点
- 拓本 二点
- 写真帖 二点
- ガラス版ネガ 八八点
- 研究資料目録カード(二〇〇枚) 二頭
- 研究ノート用ゴム印 二点
- 計一、三九点